

灰色提督と桃色の艦娘 達

バインド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある鎮守府にはおかしな提督と艦娘達がいた。

提督は深海棲艦と繋がりがりがあり、艦娘達は皆変であった。

これはそんなおかしな鎮守府の日常である。

目次

白＋黒？	1
イケメン＋乙女＋天龍	6
オカン＋罵倒＋霞	11
ゴーヤ＋オリヨクル＋伊58	18
春雨＋ジ○ング＋駆逐棲姫	25
カメラ＋恐縮＋青葉	30
お母さん＋居酒屋＋鳳翔	36
アへ顔＋サラシ＋武蔵	41
カタパルト＋アホの子＋利根	51
幸運＋雨＋時雨	57
初期艦＋敵＋イ級	68
提督＋深海棲艦＋家族	75

揚陸艦＋蜻蛉＋あきつ丸	84
クール＋マゾ＋若葉	94
写真＋レコーダー＋修羅	102

白十黒Ⅱ？

「ふう、終わったか」

「ご主人様、それはフ・ラ・グというヤツですぞ」

「ははは、もう書類は勘弁だ」

執務室でいちやついているこの2人、この鎮守府の提督と艦娘の漣である。

漣は初期艦であり提督と最も仲の良い艦娘だ。

提督に想いを寄せるが、本人は気付きもしない。

この様に

「あの…ご主人さまはこの後予定っておりますか？」

漣が顔を赤らめモジモジとしながら提督に聞くのだが。

提督は

「いや、今から待ち合わせがある」

と、即答した。

「そう、ですか…」

これには意気消沈せざるをえない漣。

待ち合わせという単語に更に消沈する。

しかし漣は

(挫けないんだから!)

と、諦める気などさらさらない様だ。

「じゃ、もう行くから留守は頼むぞ」

漣は提督からの頼まれごとに嬉しくなり満面の笑みで敬礼をした。

「かしこまりました!ご主人さま」

提督が立ち上がり敬礼をして執務室から出て行く。

一人ポツンと残った漣は深く深呼吸をしてから周りを見回した。

そして誰も居ないことを確認すると先程まで提督が座っていた椅子の部分を舐めだした。

「ぺろっ… れろっ… ごひゅじんひやまあ… れろれろっ…」

駆逐艦漣は… ペロリストであった。

あれ? もしかして頼られて喜んでたんじゃなくて居なくなるから喜んでたの?

え? 両方? ああ、そう。

提督は鎮守府を出て、トラックで浜辺へ向かった。待ち合わせの場所なのだ。

到着すると、既に人が待っていた。

車を止めて走り出し、提督はその人に近づき被っている帽子を取り、頭を下げた。

「遅れてすまない」

「私は大丈夫よ司令官！」

そう言つてにこりと笑つて許してくれた。

提督は顔を上げ笑い返す。

「ありがとう、今回も頼らせてもらうよ」

「これからも、もっとももっともおーっと私に頼つていいのよ！」

「はは、よろしく頼むよ」

浜辺には、一人の少女がいた。

しかし、人間ではない。

【戦艦レ級】

人類にはそう呼ばれている。

「日本語は完璧だな」

「この私の本気なのよ？当然じゃない！」

人類の敵であるレ級と人類を護るべき提督が話し合っている。

いま、この空間がどれ程異質なものなのかお分かりいただけるだろうか。

「それじゃ！早速取り掛かるわ！」

「ああ、お願いする」

「任せといて！」

レ級が荷台のドアを開け、艀装を展開した。

すると尻から蛇の様なものが現れ、口をトラックにの荷台へ向けた。

そして

『オロロロロロロロロロロロ』

口から沢山のボーキサイトが出てきた。

ボーキサイトはあつという間にトラックの荷台を埋めた。

「今回もありがとな、うちはボーキサイトよく無くなるからな……ハア」

提督が溜息を漏らす。

きつと食う母達の事だろう。

「元氣ないわねーそんなんじや駄目よお！」

「そうだな、じゃあ本題に入ろう………過激派はどうだ？」

提督の纏っている空気が変わる。

「今の所動く気配は無いみたいよ」

「そうか……」

「あと駆逐棲姫ちゃんが会いたがっていたわ！」

提督の脳裏に一人の少女が浮かぶ。

「そうか、もう少しで長期休みがあるから待っていてくれと伝えてくれ」

「わかったわ」

「じゃ、少し遊ぶか？」

「いいわよ？ 鬼ごっこで勝負しましょ！ 司令官が鬼ね！」

レ級が浜辺を走り出す。

提督もふっ、と笑って走り出した。

その後、門限を過ぎて大淀に正座させられる提督と港湾水鬼に正座させられるレ級がいたとかどうか。

イケメン+乙女||天龍

カリカリグウーカリカリスピーカリカリむにやむにや

執務室には提督が走らせるペンの音といびきが響く。

提督が座っている執務机の前に設置してあるソファで寝ている艦娘。

彼女の名は天龍、おっぱいの付いたイケメンである。

遠征から帰投し、疲れていたのかそのまま眠ってしまった。

本日秘書艦の雷はもう執務室にはいない。

ここの鎮守府では午前7時から午後9時までを秘書艦の勤務時間としている。

駆逐艦達の事を思つてこの時間なのだ。

とある駆逐艦だけは本人の希望により24時間勤務になっている。

因みに提督の勤務時間は午前7時から午後10時までである。

実は今日の書類は終わっているのだが、先日門限を破つた為その反省文を書いている。
提督がふと時計を見る。

提督がふと時計を見る。

そして時刻が午後10:48分を指していることを確認するとペンを置いて身体を伸

ばし、硬直した。

提督は集中し過ぎて今の今まで天龍が寝ている事に気が付かなかった。

このままでは風邪をひいてしまうと思いきや、椅子から立ち上がり近づく。

そして優しく声をかけ、身体を揺する。

「おい、天龍、起きろ」

「んっ…んっ?」

天龍は眠たそうに目を開ける。

「提督が俺の目の前にい?…夢かあ?」

「はは、何を言ってるんだ」

提督は何時ものイケメンな天龍の寝ぼけている姿をおかしく思い、少し遊ぶ事にした。

「これは夢に決まってるだろ?」

「そうかあ、夢なんだな…って事は何をしても大丈夫なんだよな?」

「確かに夢だしな」

すると天龍がいきなり立ち上がり提督にキスをした。

!?!?!?!?!?!?

いきなりの事で提督の脳内はパニックを起こしていた。
すると天龍が唇を離して

「あ、やっぱ無理だ」

そう呟き、倒れた。

提督は急いで天龍をお姫様抱っこで持ち上げ工場へ向かった。

鼻と股からオイル漏れをしており顔が赤く、呼吸も速い。

工場の扉を叩き叫ぶ。

「明石！居るか！」

「はいい!?!提督?!い、今開けます！」

工場の扉が開き、明石が出てくる。

「明石！天龍の修理を頼む！オイル漏れだ！」

「わ、わかりましたあ！」

天龍を明石に預け、ほっと一息つく。

するとスマホが震えている事に気が付き、直ぐに電話に出る。

「あ！司令官？」

「どうしたレ級」

「過激派が動いたのよ！」

「!?何処に!」

「○○鎮守府の方ね!」

「あそこか……わかったありがとう。引き続き報告を頼む」

「レ級、司令官のためにもっともくつと働いちゃうねっ?」

「ああ、ありがとう」

そう言つて電話を切る、するとメールが来ている事に気が付きメールを開く。

短く纏めると大規模な防衛戦の為に物資を送れ、というものだった。

すると工廠の中から明石が出てきて

「提督、ここは明石にお任せ下さい。提督は明日もお早いでしょう?」

「だが…… ああ、頼む」

そう言つて提督は執務室へと戻る。

そして今ある資材を確認する。

後の仕事は明日やろうと提督室へ行き、ベッドにダイブ。

そのまま眠りについた。

「天龍さん、どうしてオイル漏れなんか起きたんですか?」

「いや…その…」

その頃返答に困る艦娘がいたそうなの。

オカシ十罵倒Ⅱ霞

夜、提督は執務室で寛いでいた。

「ふうく、仕事終わりのお茶は美味しいな……」

大規模な防衛戦が控えている、忙しく働いている提督がいると言うのに自分が酒を飲む訳には行かない。

まあ、遅くまで働いたんだ。お茶をゆっくりと飲む時間位は許されるだろう。

そう思いまた温かいお茶を飲む。

「だから何よ？」

「ありがとう霞」

「あつ…… えつと…… 別につ、嬉しくも…… なんともない…… わ……」

彼女は駆逐艦霞

キツイ喋り方をするが面倒見がよく、優しい女の子…… おばあちゃん？ いや、なんでもない。霞は女の子だ！ うん！

そしてその喋り方も艦時代に…… いや、この話は止めておこう。

おほん、しかも火傷しない丁度いい熱さのお茶を執務終わりに渡してくれるという気

遣いも出来る。

仕事が残っていると夜遅くまで罵倒しながら手伝つてくれる。

これはいいおかん：・嫁さんになるな！

いや、子供が出来たら結局おかんだからいいのか。いや、お艦か？

ただ私は遠慮したいな。Mじゃないから。

そんな霞だが最近執務室に忍び込んでいるという噂がある。

これは確かな筋なのだが：・正直信じられない。

何か執務室でやる事でもあるのだろうか？

私に言わないという事は何か知られたくない事かもしれない。

だが、どんな事であろうと執務室に勝手に入るのはいけない。

もし本当なら何らかの罰を与えなければならぬ。

なので今日はその噂の真偽を確かめようと思う。

残っているお茶をグイッと飲み干し、机に湯呑みを置く。

「よし、部屋に戻るから電気消すぞ〜」

提督は立ち上がり部屋の角にあるスイッチを押すため歩き出そうとしたが

「ち、ちよつと待ちなさいよー！」

霞にストップをかけられた。

「どうしたんだ？」

「ちよ、ちよつとやる事があるから先に部屋に戻つてくれない？ 電気は消しておくからむ？ やる事？ 怪しいな。」

ここで艦娘がやる事と言つたら執務しかない。

それ以外に何があるというのか。

まあ、今は従おう。侵入を待つ手間も省けるしな。

「わかつた、遅くまで起きてるんじゃないぞ？」

「分かつてるわよー！」

少し早足で執務室から出て、扉を閉める。

そして扉の横で待機。

(3分経つたら突入して何をしているか突き止めてやる)

提督は燃えていた。腕時計で時刻を確認し息をひそめる。

提督は腕時計を確認し、突入の覚悟を決めた。

3分経つても出てこなかったのだ。

中で何をしているのだろうか。

扉に耳を当て音を聴く。

執務室の中から聞こえて来るのは機械の振動音と霞の声だ。

提督は大きく深呼吸をして、扉を開け突入した。

執務室の中には

扉の方を向き、執務机の上で電動マッサージ機を股に当て足がVの字になっている霞がいた。

霞が扉の開く音に意識を向け、目が合った。

「えっ……」

霞は何が起きているのか分からず目をパチパチとさせていた。

「むっ？」

提督も霞が何をしているのか分からず固まっていた。

部屋は静寂に包まれ……失礼。

電動マッサージ機の機械音のみが静寂を阻んでいた。

霞の方が提督よりも早く我に返り

「ななっ、なななななんているのよ！」

姿勢はV字開脚のまま霞は提督に問う。

すると提督は

「……すまない」

土下座をした。

「ちよ、ちよつと司令官!? どうしたのよ!? あつ……」カチツ

いきなりの土下座に戸惑いを隠せない霞。

そして自分の姿勢をようやく認識し、机から降りて電動マッサージ機の電源を切った。

電源を切つたと同時に提督は申し訳なさげに話し出す。

「霞……すまない」

「い、いきなり何よ?」

「まさかそこまで疲れを溜めているとは……私のミスだ。すまない」

提督が更に額を床に擦る。

霞がぼかんとする。

「えっ? な、なんの事なの? というか顔をあげなさいよ!」

提督がゆっくりと顔を上げる。

その顔は嬉しく、そして悲しい顔をしていた。

「私を気遣つて分からないフリをするな。あまりにも疲れが溜まっていて、耐えきれず私の電動マッサージ機を内緒で使つたのだから? 何も私に言わなかつたのは私やみんなに心配して欲しくなかつたからなんだろう?」

まったく、本当に優しいな、霞は。

ん？視界が霞んで：：まづい！

「そ、そうよ！まったく、なんで気づかないのかしらこのク《ガバツ》じゅうううう!!」

提督は、いきなり霞を強く抱き締めた。

霞は慌てふためく。

「いつ、いいいいいいいきなりなななな「霞」!?!」

抱き締めながら提督は話す。

「私はこんなクズでも霞の上司なんだ。お前の仕事の負担を減らしたりするくらいはできる。だから、辛かったらせめて相談くらいはしてくれ」

私の涙目になっている顔を霞に見せる訳にはいかない。

涙を流さないよう上を向く。

「スーハー：：スーハー：：クンカクンカ：：イ：：クウ：：うっ：：」

霞は身体を震わせ、呼吸は深く、時々鼻を鳴らし、声を押し殺している。

どうやら霞も泣いているみたいだな。

泣き止むまでそつとしておこう。

二人はしばらく抱き合っていた。

後日、提督は霞に電動マッサージ機を買ってあげたそうなの

ずるいずるいずいずいずいいうんとみんなが言うもんだから、みんなに買ってあげたんだって。

ゴーヤ+オリヨクルⅡ伊58

提督は、今日も執務室で書類を書いていた。

今日は防衛戦に関しての書類が多く、何時もの書類の倍はあるだろう。

お腹が空いているが食堂に行く余裕はない。

今日は会いたがっていた駆逐棲姫と遊ぶ約束があるのだ。

どんなおもちゃを持って行こうか… おっと、集中集中。

因みに提督は朝食も抜いている。

空腹を抑え、執務に取り組んでいると柱時計が鳴った。

ふと柱時計を見ると正午を指していた。

「ヒトフタマルマルでち。お昼食べてから、もっかい執務やるー」

今日の秘書艦は伊58。みんなからはゴーヤ、でっち、オリヨクルなどというあだ名で親しまれている。

まあ、オリヨクルは敵艦隊が強化されてしまったのでもう出来ないが…

私はあだ名では無く普通に58と呼んでいる。

「ゴーヤと呼んでも良いと初めて会った時に言ってくれたが、初対面であだ名は如何なものかと思い、まずは58と呼ぶ事にした。

いつかあだ名で呼んであげようとも思っていた。

しかし、私は見てしまった。

彼女がろーにでつちと呼ばれて怒っているのを。

もしや彼女はあだ名で呼ばれるのを嫌がっているのではないかと考えた。

出来るだけ早くここに馴染む為の術であだ名を使ったのではないかと思つたのだ。

自分の感情を押し殺して。

ろーの件ではその嫌がっている感情が出てしまつたのではないかと。

彼女に問い詰めても嘘を言われる可能性が高い。

なので今は同じ潜水艦のイムヤに探つて貰つている。

頼む時、イムヤに溜息を吐かれた。

気付くのが遅過ぎだということだろう。

提督としてまだまだ不甲斐ないな……

「てーとく、一緒に行く？」

満面の笑みで提督に呼びかける伊58。

「すまない、今日は書類が多くて昼は抜くつもりなんだ。一人で行つてきてくれ」

「そうだ、まずは書類だ。」

「本当に今日は絶食しないと約束に間に合わないかもしれない。」

「わかったでち…」

伊58はガツクリとして椅子から立ち上がり、とぼとぼと執務室から出て行った。

「うっ、罪悪感が…」

「いやいや、罪悪感を感じる時間すら惜しい！」

「よし！やるぞおおおお!!」

カリカリカリカリカリカリカリカリカリ

数十分後

「てーとくー！」 バァン

執務室の扉を開け放ち伊58が飛び出してきた。両手に料理が乗った皿を乗せて。

「提督提督ー！ これ食べるでち！ ゴーヤ特製『ゴーヤチャンプル』でち！」

「どうやら料理はゴーヤチャンプルの様だ。」

「お昼食べないと力がでないでち！」

「成る程、確かにそうだ。」

「ご飯を食べないと力がでないし空腹で集中も出来ない。」

そして今なら食堂に行く時間を短縮できる！

取り敢えず書類を机の隅に置いてつと。

「ああ、ありがとう58。いただくよ」

私を思つて作つてくれたゴーヤチャンプル……あれ？

「58?」飯は?」

「チャンプルはおかずじゃないでち!」

あ、58の中ではゴーヤチャンプルは主食なのか。

じゃあおかずは……いや、チャーハンみたいなものか。

それではいただくとしてしよう。

「いただきます」 「いただきますでち」

モグモグモグモグモグ 「てーとく」 「ん?」

不意に伊58が提督に話しかけた。

「てーとくはどうしてゴーヤを58つて呼ぶでち?」

これはあのあだ名の問題か……ここはさり気なく話をそら……いや、いいチャンス

じゃないか!ここで話をきちんとしよう!

まあ、いきなり聞いても駄目だからな。

最初は普通に。

「名前の通りじゃないか、別におかしい所は無いと思うが」

「いつ提督はゴーヤって呼んでくれるでちか？イムヤだつてはつちやんだつてあだ名で呼んでるのに」

おつといきなり核心か。

うーん、正直に言うべきなのかなあ？でも…いや、あだ名の説、あれは仮説だ。もしかしたら別の何かがあるのかもしれない。

ここは思い切って…

「最初は早くあだ名で呼んであげようと思つたんだかな、ろーにでつちつてか呼ばれて怒っているのを見てな、もしかしたらあだ名で呼ばれるのが嫌なn「そんなわけないでちー！」

ん？違うのか？

「じゃあなんで怒つてたんだ？」

「それは…その…で、でつちつて提督に呼んでもらいたかつたんでちつ！…あ、これは…そのお…でちい…」

そういう事だったのか。

子供に良くある独占欲というやつだな。

こーじやなきややだ！みたいなの。

成る程、納得がいったぞ。

「でっち」 「あひい！」

「ごめんな、気づいてやれなくて。これからは沢山呼んであげるからな」

「あ、ありがとでちい…。」

うん、一件落着だな。早速沢山呼んでやるとするか。

「でっち」「んほお！」

中々独特な返事だな。そして何故変顔をしているんだ？

伊58の今の顔は頬を染め、白目を剥き、舌を垂らしている状態である。

「今まで呼んでやれなかったからな、今日は沢山呼んでやるぞでっち」「イグウ！」

「でっち！でっち？でっちでっちでっち？でっち？でっち？でっち！」

「ん、お、お、お、お！も、う、や、へ、る、て、ち、い、い、い、い、い、い、じゅ、つ

、どいぎゆううううう！?!…アヘエ」ガクッ

伊58は、唐突に意識を手放した。

それに気付いた提督は

叫び過ぎて疲れて寝てしまったのか？

などと思ひ椅子から立ち上がり伊58を仮眠室へ運ぼうとすると、床に何か液体が溢れている事に気が付いた。

そして提督は思った

これは：：油か？ゴーヤチャンプルを作る時にゴーヤが溢して、その水着のままゴーヤチャンプルを持つてきたのか？

でも匂いが：：いや、間宮が新しい油でも買ってきたんだろう。

自分の事ではなく私を優先して：：ありがとう58.:. いや、でっち。

提督は執務機の引き出しからミニタオルを出して伊58を拭いた。

伊58は何故か拭かれるたびに身体を跳ねさせていた。

これでよし、後はこのソファーに寝かせてつと。

よし、ゴーヤチャンプル食べたら続きやるぞ！

うめえ：：

春雨十ジ〇ングⅡ駆逐棲姫

夜中、提督はこっそりと鎮守府を抜け出した。

大淀にバレてしまうと説教をくらうのだが、約束なので仕方がない。ある程度鎮守府から離れると押してきたバイクに乗り、走り出した。深海組とよく待ち合わせ場所として使うあの浜辺へと。

提督が浜辺近くの駐車場に着くと、バイクから降りて時計を確認する。

うん、まだ10分前だから余裕だな。

のんびりと歩いて浜辺へと向かう。

浜辺へ着くと提督は辺りを見回して

「まだ… 来てな 「司令官、真夜中です。はい」!？」

提督は辺りをもう一度見渡す。

しかし、誰もいない。

「あの… 下です」

提督は下を向き驚く。

何故なら足下には横たわった悪雨… 失礼、駆逐棲姫がいたからだ。

「な、なんで倒れてるんだ？」

「少し、疲れてしまいました… はい」

話を聞くと、どうやら私と遊ぶのが楽しみではしゃいでいたら私と遊ぶ前に疲れてしまったらしい。

可愛いなこのヤロー！

取り敢えず口に砂入るから仰向けにして… 今日まで疲れたし俺も寝転ぼ。

うわっ、すげえ綺麗な星空だな。

ってか夜空を見上げるなんて久しぶりだなあ… 天を仰ぐ事は執務室でよくあるけど。

「司令官、夜空が綺麗ですね。ずっと見ていたいです」

「ああ、そうだな」

小さい時におじさんに星座教えて貰ったなあ。懐かしい。

今では大淀に正座を教えて貰っているとはな。恐ろしい。

「あつ、あの。司令官、今日も本当にお疲れ様でした」

「ありがとう。どうだ？ 最近」

うわあ、娘に喋りかけるお父さんみたいになつてう…

だ、だって遊ぶと思つて話題なんか全然持つてきてないんだもん！

「新しい艦が、はい、出来ました」

うーん、それはレ級に聞いたし俺が聞きたいのはそうじゃ無いんだよ！

「いや、そうじゃなくてだな。自分の事で何かないか？」

「ううっ、ごめんなさい。そう言えば、鎮守府の長門さんが悪雨ちゃんつて言いながら私を捕まえようとしてました。はい」

あいつめ… 帰ったら陸奥に頼んで叱ってもらおう。

「すまない、私から言つておこう」

「あ、あの… 司令官。私と遊んでくれませんか？」

はははは、何を言っているんだ？

「その為にここに来たんだろ？」

「！…はい！」

駆逐棲姫さんや、鬼ごっこでジオ○グはズるいですつて。

空飛ばれたら勝ち目ないですよん。

む?… なるほどピンクパンテグハツ!

いきなり叩かないで!… おや?

「駆逐棲姫、日の出だ。もう帰らないとな」

「!?… あの、次は…」

「もう少しで長期休暇に入るから、また遊ぼうな」

「… はい!」

よし、帰るか!

つてか徹夜だし服は砂だらけだし… また大淀に怒られるなあ…

あ、おもちや用意したのに持つてくるの忘れちゃったよもう。

提督が来る前のまだ元気だった駆逐棲姫

「司令官は鎮守府でも元気にやってるかな。うっ… ふう…」

提督が来る直前の駆逐棲姫

「アヘエ…」 バタツ

その後提督は大淀に正座を教えられましたとき。

カメラ+恐縮Ⅱ青葉

提督は取材室と呼ばれる部屋に一人の艦娘と向かい合つて座っていた。

「今日は取材活動へのご協力ありがとうございます！」

彼女は重巡青葉。よく艦娘の自然な写真を私に見せてくれる。

きわどい写真を見せるのは止めて欲しいが……

提督は今日、彼女の取材を受ける約束をしていた。

「ああ、なんでも聞いてくれ」

「恐縮です！」

なんでも私が答えてあげよう！

あ、答えられる範囲な。

「では！提督のお好きな料理は？」

うーん、沢山あるんだが……響が最近もつて来てくれたアレかな。

「ポルシチだな。響の作ってくれたものがとても美味しかったのでな、ハマってしまっ

たよ」

「そんなに美味しいんですか？」

ああ、また作ってもらって食べたいなあ。

おいそこ、ロリコンって言うな。

あ！そっか！

「今度響に頼んで作ってもらったらどうだ？」

「はい！そうさせていただきますう！」

そして俺の分もお願いしようつと。

「では次に！提督がこの鎮守府で一番思い出に残っている事は？」

沢山思い出はあるんだが……一番と言われると……

「うーん、一番か……あ！居酒屋鳳翔を建てたときだな。あの時の鳳翔の嬉しそうな顔は忘れられないな」

未だにあの笑顔は鮮明に覚えている。

何時もは物静かなんだがあの時は飛び跳ねて喜んでいたなあ。

あれ？青葉あの時の写真を新聞に載せてなかったか？

後で艦隊新聞を確認するか。

「ふむふむ、提督の好きな時間は？」

「一人で読書をしている時かな」

ゆっくり自室でコーヒーを飲みながら本を読むのが……ああ、至福だ。

「どのような本を読んでいらつしやるんですかあ？」

「今は孫子を読んでいるな、どうだ？貸してやるぞ？」

実に面白いぞ？為にもなるしな。

「恐縮です！ぜひぜひ！」

「ああ」

と、青葉の質問責めは続き、ついに最後の質問に。

「最後に、提督は艦娘の事をどう思っていますか？」

「ふむ、艦娘の事か…」

うーん、なんて言ったらいいんだろうか…

そういうえば艦娘は兵器か人間かっていうので問題になったなあ。

正直どうでもいいとは思うがな。

だってそんなものは考えるだけ無駄だろ？

彼女達は私達を守ってくれる。それだけで十分じゃないか！

兵器か人間かなどは関係ない。

使えるか否か…だ。

なーんて冷徹になれないのが俺なんだよなー！

捨て艦とかやった事もないわ!

大破進軍なんて女神あつても出来ないチキンですよ!

だつて沈めたく無いんだもの!

まあ、艦娘をどう思うかと言われると…:

「大切な存在…: だな」

「大切な存在…: ですか?」

「ああ、艦娘は海を守る為にとても大切な存在。そして私にとっては部下であり、娘の様な大切な存在…: なんか恥ずかしいな」

いやああああ!! 恥ずかしいよお! 顔からインフェルノしちゃうよおお!!

そして

「まあ、彼女達が私の事をどう思っているのかは知らないがな」

これが一方通行だったらさらにはずかしい…:

そんな事を提督が考えていると、青葉がくすりと笑い…:

「…: 気になるんですかあ? いい情報ありますよお?」

失礼、悪い笑みを浮かべねつとりとした声で提督に聞いた。

なんだと!?! そんな情報まで青葉は手に入れているというのか!

むむむ、実に気になる! だがしかし!

「いや、大丈夫だ。私は彼女達を信頼している。彼女達がどう思おうとそれだけで充分だ」

はい、本当は聞くのが怖いだけです。

空母や戦艦ならまだしも駆逐艦達から嫌われたら俺はもう精神を病んじゃうよ…

「そうですか… これで取材はお終いです！ありがとうございます！」

「ああ、ありがとう」

そう言つて二人が椅子から立ち上がる。

ふう、やっと終わったか。

「あ、いい顔！ いただきますう！」パシヤ

ぬおっ！眩しい！

「いきなり撮らないでくれ。というか私の写真なんかなにに使うんだ？」

「え、今の写真ですかあ？ あ、青葉、艦隊新聞に使わせていただけどうかと…え、ダメ？」

「別に駄目ではないが… 今みたいに急に撮るなよ？ みんなびつくりしちゃうからな」

「恐縮です！」

ん？つまり直すのか？直さないのか？

「それではありがとうございます！」バタン

そして一人残された提督。

「ふう…： そうだ艦隊新聞…：」

廊下をスキップしながら青葉は自室へと向かう。

そして撮った写真を確認する。

少し顔を緩めた提督の写真。

涎を垂らしている事にも気付かず青葉は自室へと到着した。

そしてドアノブを回し扉を開けた。そこには…：

壁や天井一面に提督の写真がびっしり貼られている部屋があった。

「提督の新しい写真…： ガサは出撃…： 青葉、じつとしてられないな」

青葉は撮ったばかりの提督の写真を見ながら手を下に…：

その後、帰って来た衣笠に怒られたそうなの。

「また青葉は一人で楽しんで！次は二人でつて言ったのに！」

「き…： きよーしゅきゅ…： れしゅ…：」

お母さん十居酒屋Ⅱ鳳翔

「あー、終わったー！」

提督がペンを置き、両手足をぶらぶらさせる。

すると机に温かいお茶の入った湯呑みが置かれた。

「おお、鳳翔か。すまんな」

「いえいえ。お疲れ様です。お風呂にしますか？ご飯にしますか？それとも…ふつ、じょうど「そうだ、今日は鳳翔にするか」…ええっ!」

彼女の名前は鳳翔、又の名をお母さん…というかおばあちゃ…すいませんこちらに弓を構えないで下さいお願いします!…おほん、失礼。

提督が着任する前からこの鎮守府にいる古参艦である。

今はもう出撃はしておらず空母達の先生をしたり居酒屋を経営したりしている。

「わ、わわ私ですか?!いい、いえ、嫌ではありませんむしろ…」

(い、いつまでも演習って訳にもいきませんっ!)

「そうか、では早速行こうか」

「は、はいっ！」

(やる時は、やります！)

提督の私室は執務室の右手にあり、私室と執務室は扉一枚で行き来する事が出来る。明石に取り付けて貰ったらしい。

鳳翔が提督の私室につながる扉を開けようとすると

「何してるんだ？先に行くぞ？」

「えっ？」

鳳翔が驚き、声のする方を向くとそこにはコートを着た提督が廊下から執務室の扉を挟んで呼び掛けていた。

鳳翔は不思議に思ったが何か考えがあると思いき出した提督について行く事にした。

いやっほー！久々の居酒屋鳳翔だあ！なかなか行って無かったんだよなあ。

だが、今日に行ける！執務が多く、遅くなってしまう事により駆逐艦達の目を気にしなくても良いのだ！

向かう時に駆逐艦に見つかってみろ、ついて来ちやうだろ？

流石に駆逐艦を居酒屋に連れて行く訳にも行かないよ、教育に悪い……あれ？艦娘っ

て全員成人済みじゃ……深く考えないようにしよう。

え？夜まで待てばいいって？私室の扉の前には何故か毎日艦娘が居るんです。彼女達が言うには警備だそうです。

もしも夜出ようとしてみる、俺の警備だからついて来ちゃうでしょ？俺は店で飲みた
い派だからありがた迷惑というか……この鎮守府の提督だから警備するのは当然なの
でやめるとも言えないし……あ、ちなみに今日の秘書艦は五月雨で護衛艦は鳳翔だ。

お、ついたついた……ん？貼り紙？

居酒屋鳳翔の入り口には「お休み」と書かれた貼り紙が扉に貼られていた。

（提督はどうして私のお店へ？あつ！もしかして提督はそういうのが好きなのでしょう
か。秋雲ちゃんに貰ったあの本に確か……）

『ところでお客さん、俺の徳利（意味深）を触って見てくれ、こいつをどう思う？』

『凄く……チンチン（方言）です』

『嬉しい事言ってくれるじゃないの、味わってみるかい？』

あら？これは男性同士？

「なあ、鳳翔」

「は、はいっ！あ、今開けますね」

（どんな事でも、提督のご期待に応えます！鳳翔、出撃致します！）

ガチャ　ガラガラガラ

鳳翔が振り返ってお辞儀をする。

「いらっしやいませ提督」

鳳翔、休みだったのに俺のために店を……。ありがとう。今度からしつかり確認するでしょう。というかよくよく考えれば鳳翔は今日俺の警備だから休みなのは当たり前か……。さて、どれを頼もうか。あれもいいしこれも……。お！これにするか

「じゃ、鳳翔（酒）を頼むとするか」

「は、はい！鳳翔（艦娘）でしゅね！」

なんでそんなに慌ててるんだ？

そんなことを考えていると鳳翔が着物を脱ぎ出し、そして止まった。

「む？どうした？」

「や、やつぱり私には無理ですう〜！」

鳳翔はいきなり居酒屋を走り去ってしまった。

「……何か執務室に忘れ物したのか？……勝手に一人で飲むか？……ええい！我慢が出らんわ！飲んじゃお！」

三十分後、鳳翔が戻ってきた。

「提督、あの……… どうかと思ったのですが、私も提督の精をお受けできれば、と………
あの……… あらっ？」

そこには鳳翔（酒）を飲みながら座っている提督がいた。

「おお、鳳翔。忘れ物か？お酒は頂いているぞ。にしても今日は居酒屋鳳翔にして正解だったな。久々に鳳翔が飲めたよ」

そして鳳翔は理解した。

今日は（居酒屋）鳳翔にすると提督が言ったということ、提督は（お酒の）鳳翔を頼んだのだということ。

鳳翔は、目の前が真っ暗になった。

バタン 「鳳翔？… 鳳翔！鳳翔!!は、早く工廠へ!!」

「鳳翔さん、どうしてお倒れに？」

「あの……… ごめんなさい」

「ま、どうせ提督がらみなのはわかってますけどね」

「…」

アへ顔十サラシⅡ武蔵

「いやあー風呂はいいなあ、こう、なんていうか日本つて感じた。あー気持ちいいー」

いやあ、風呂に一人で浸かると独り言が出ちゃうんだよなあ。

「ああ…風呂は良いな…」

「…何故いるんだ？」

提督は入浴中だった。何故か武蔵と一緒に。提督は武蔵の身体をまじまじと見る訳にはいかなかったので武蔵に背を向けた。

武蔵、彼女はとても強く、遅しく、そして勇ましく皆を引っ張って行くリーダー的な存在。だが、そのサラシはどうかならないものかと提督は日々思っている。そして敵の砲弾を自ら受けに行く超DMであるが提督は味方を庇ってくれていると思っている。

ここは鎮守府内にある銭湯、ドックとは別で娯楽施設として艦娘や妖精達が利用している。提督も利用しており提督が使用する時は侵入禁止の札がかけられる。

え？今の二人の状態？そりゃ勿論皆様のご想像通り、双方裸です。やったね！

「うっ…この…バイタルパートまでやられては、な…仕方ないさ…」

先程まで風呂に浸かり顔が緩んでいた武蔵が急に苦しそうな顔をしました。え？イケメンな武蔵の苦しい顔が想像出来ないって？武蔵の中、大破絵そっくりだよ。つまりアへ（ry

「はは、この銭湯にはドツクのような修復機能はないから浸かっても治らんで？…いや、だから何故いる」

提督は武蔵の冗談を軽く流してツツコミを入れた。提督は涼しそうな顔をしているが実は驚きが一周回って逆に冷静になっているだけである。

因みに何故ここに武蔵がいるのかというと武蔵は提督が女性の裸を見て恥ずかしがる姿を見たいだけ…というのには建前で、本音は提督の裸が見たい、自分の裸を見て欲しい、はしたないと叱って欲しい、この場でケダモノになって襲って欲しいなどという目的がある。

そして今武蔵は

（提督よ!?!… まあ、そういったことも… 嫌いではないが…）

襲われた場合を妄想していたりする。

何故武蔵はここにいるんだ？きちんと侵入禁止の札をかけたはずだが… はっ！もしかして先に入ってたのか!? 入る時に誰か居ないか警備の清霜に見てもらい誰も入っていないことを確認して入ったのだが清霜は見落としていたのか… ま、失敗は誰にで

もあるからな、責めるなんて事はしないさ。しかも私も気付かなかった。

でだ、つまり私が武蔵の入っている風呂に後から入ったということになる。女性が入っている風呂に後から男性が入る……よし。

「すまなかつた」

そう言つて提督は急に立ち上がつて脱衣所へ歩き出した。

武蔵は少しやり過ぎたかと思つた。追いかけて謝らうと考えていると、提督の次の一言で思考が吹き飛んだ。

「自首してくる」

武蔵は提督の言っている意味が分からなかつた。恥ずかしがるでも怒るでも襲うでもなく何故自首なのか。一先ず武蔵は提督を引き止めた。

「相棒!? どうしたというんだ?」

提督は武蔵に背を向けたまま喋り出す。

「私は女性のがいるのにも気付かず風呂に入り、あまつさえ裸まで見てしまった。憲兵に自首するしかあるまい。お前達と今までいれて楽しかつたぞ。「ま、待て! 相棒!」は、こんな変態でもまだ相棒と呼んでくれるのか……ありがとう、じゃあな」

そう言つて提督が歩き出すと武蔵が回り込み頭を下げた。

「すまなかつた! 許せ!」

武蔵は提督に頭を下げ軽くイッた。なぜなら武蔵は提督に頭を下げただけで感じる訓練されたドMだからだ。中破で帰投した時などは提督に視姦されていると思えば顔を晒す程のドMだ。こいつあ酷え。

ゴホン、武蔵の謝罪を聞いた提督はフツと鼻で笑い頭を垂れた。

「武蔵、それはこちらの台詞だ。まあ、許されない事だがな」

「違うんだ相棒！」

武蔵は先に風呂に潜んでいた事や、提督の恥ずかしがる姿が見たかった（建前）事や、清霜に見逃してもらった事などを洗いざらい吐いた。

それを聞いた提督は思った。心臓にとっても悪い…と…

「本当にすまなかった！清霜は悪くない。償いはする！許してくれ！」

武蔵は頭を下げ、提督に見えないようにニヤリと笑う。

きっと提督は裸を見て興奮していて、償いと聞いてHな事を考えていると予想しているに違いない、きっとHなお願いをしてくれるに違いないなどと考えていた。提督はHが出来て、武蔵はHしてもらえてwin-winである。

（提督の対空火力（意味深）も…まあ、気になるな）

一方提督は武蔵の優しさに感動し、Hな気分どころではなかった。

武蔵、お前本当にいいやつだよな。俺の間違いを自分の責任に、しかも清霜まで庇う

なんて：： 武蔵、やっぱりお前はすげえよ。償いをするのは俺の方だけ。償いとかさせたくないけど、それだと清霜の責任まで取る覚悟を決めた武蔵に申し訳がない。直ぐに実行出来て、償いだから俺の利益になり、かつ武蔵がそれなりに嫌がるものか：： 風呂場で俺が得して女性が嫌がるもの：： はっ！

「よし、では償いをしてもらおう。背中の中の流しあいをしようか」

「ああ、いいだろう。：： うん!?わ、わかった」

この罰なら妥当だろ。これなら直ぐに出来るし、俺は女性の背中を流して流されて得するし、武蔵は俺に裸を見られる。

ぐへへ、今宵俺は欲望を解放してクソ提督になるのだフハハ!!

そして日頃の感謝を込めて背中を洗ってやろうと思う。

「じゃ、早速頼むわ」

そう言つて近くの洗い場に座る。

その時武蔵は必死に考えていた。何故流しあいなのか、いくら考えても分からずとりあえずメリットだけ考えた。提督の背中が流せて提督に背中を流して貰える。武蔵は気付いてしまった。メリットしかない事に：：

「大丈夫。この武蔵に、全て任せておけ」

武蔵は座っている提督の背後に移動し、垢すりを手に取り石鹸を擦り付けて提督の背

中を洗い始めた。

シャツシャツシャツシャツ

垢すりで提督の背中を流す音だけが欲じよ……浴場に響き反響する。

(いやー、美女に背中を洗って貰えるとは……人生なにかあるかわかんないなあー。静かだな、なにか話題はないだろうか……)

なんておじいちゃんみたいな事を提督は思っていた。

一方武蔵は

(うっ……くう……このっ………イツ……くう………)

しつこい汚れと格闘などしておらず、気絶しないように耐えるので必死だった。砲撃に強くても快樂には弱いようだなぐへへ……失礼。提督の背中を舐めたい、痴態を見て欲しいなど思っているが自重をして身体を洗っている。

少し慣れて来た所で提督が喋りかけて来た。

「その……最近はどうだ?」

「最近か?最近は、やたらでかいハンバーガー?とやらも流行っているそうだな。食べてみたいもんだ」

お、武蔵もそういう流行に乗るようになって来たか!ハンバーガーか、最近食べてないなあ……そうだ!

「じゃあ今度一緒に食べに行くか？」

「いいのか!?:. . . あ、いやだが:. . . 皆と一緒にでもいいか?」

「可愛いなあおい! つか武蔵って背中洗うの上手いな。」

「いいですとも!」

そんなたわいもない話をしていると武蔵は提督の背中を流し終わった。

「おお、ありがとう。次は私が流す番だな」

「ああ、頼みゆ:. . .」(囁んだ)

「任せろ」(気付いてない)

今度は武蔵が座り、提督が背後に。

そこで提督は重大な事に気が付いた。

武蔵、全裸な件である。

提督は天を仰ぎ溜息を吐いてから、覚悟を決めて垢すりを準備する。

因みに武蔵はイキす:. . . イキ過ぎてイク事に慣れてしまい、普通に会話出来るくらいになつている。そんなにイツでも気を失わない辺り流石武蔵と言うべきか。そして提督に背中を流して貰える事が未だに信じられなかつたりしている。

今度は武蔵から提督に話しかけた。

「どうだ? 状況は」

「状況か：。そういえば深海棲艦が最近活発になって来たから気をつけないとな：。ま、うちには武蔵が居るから大丈夫だろうがな」

「まあ、この辺りの深海棲艦はこの鎮守府に向かって来ないと思う。主に俺のせい？おかげ？だな。」

「あつはは、いいじゃないか。ま、のんびりいこう」

そう喋っている提督の準備が終わった。

提督は恐る恐る武蔵に問い掛けた。

「武蔵：。背中流すぞ？」

武蔵が振り向きにかつと笑った。

「これは償い、今は遠慮はなしだ！そうだろう？相棒よ！」

提督も笑い返した。

「ああ」

シャツ

「アヒツ！」

武蔵は身体を突き抜ける電流に声が漏れてしまった。武蔵は焦った。このまま喘ぎ続けてしまうと提督の垢すりで感じているのを気付かれてしまう。武蔵は必死に快楽に耐える事にした。

垢すりで背中を擦った瞬間武蔵は奇声を発して背中を反らせた。

この奇声で提督は焦った。

「だ、大丈夫か!? 痛かったのか!?」

「しよ、しよんなきようげき…… きやにしゃしやれらようらものらあ……」

武蔵が何故かビクビクしていたので提督は思った。もしかして力が弱過ぎてくすぐったかったのではないかと。提督は次はもつと力を入れる事にした。

「そ、そうか」

シャツ

「んおっっ!」

ぬ、まだ弱いのか?

シャツシャツシャツシャツ

「イクっ、あつ、いいじよ、あれれきよいつひい! わらひアヘエ、こぎよりやあ!」

まだ弱い? ま、確かに人間が戦艦擦っている訳だからな…… よおし! 本気で擦るぜ!

ジャツジャツジャツジャツジャツジャツ

「まりや…… りや…… まりやこによれいろれつへえ! こによむりやひひやあ…… ひる

みゃんお お お お お お お お お お お お お お っ! …… わりやひま…… まん

りよく…… ら」グデン

「なっ！どうした!？」

一体どうしたんだ!：：。もしかして逆上せたのか? 面白いえば俺よりも先に入っていたな。と、取り敢えず脱衣所に連れて行かないと! 武蔵、許してくれ!

提督は裸の武蔵を抱え脱衣所に連れて行き、廊下で待機していた清霜を呼び武蔵の事を任せ、籠からスマホを取り出して明石：：。は小破の暁を修理中だったのを思い出し、夕張にかけて武蔵が逆上させた事を伝えて念の為診て貰えるように伝えた。一安心した提督は今自分がやった事について考えた。

俺は、裸の武蔵を抱え… 胸…

「司令官! 鼻血出てるよ!!」 「え?」

この後めっちゃめっちゃ心配された。

カタパルト十アホの子Ⅱ利根

「ふんふんふん」

提督は鼻歌を歌いながら鎮守の庭を散歩していた。

え？護衛艦？一人で散歩したいって言ったらさせて貰えるよ。まあ、何処かから視線を感じるから名前を呼んだり、俺が危なくなったら飛んで来てくれるさ。仕事熱心なのはとてもいい事だ。

「ん？あれは…利根か？」

提督は庭の塀にもたれかかって空を見上げている利根を見つけた。せつかくだから世間話でもしようと思い、少し足早に利根へと近づく。

利根、彼女は少しお調子者だ。だが、私は悪い事だとは思わない。自信があるのは良い事だ。自信があり過ぎるのはアレだが…。そしてとても純粹だ。よく駆逐艦達と混ぜて遊んでいるのを筑摩と一緒に和みながら見ている。あれ？利根が姉だよな？

「ッ…」

提督は突如、足を止めた。

なんだ…あの眼は…

提督は利根が空を見上げて黄昏れていると思っていた。でも違った。利根は空を睨んでいたのだ。

鋭く、そして悲しく。

提督は声をかけるべきか迷った。このままそつとしておくべきか… 提督が出した答えは否だった。

提督たる者！艦娘が悩んだり困っていたら助けてあげるのが仕事だ！え？執務？艦隊指揮？大淀や長門、香取とかに任せときやいいんだよ！む？上司だから恐縮ちゃうかもって？考えても見てくれ、利根の様子がおかしかったら利根LOVEな筑摩が真っ先に気付いて対処する筈だ。なのに利根があの状態、つまり筑摩では解決そ出来ない事… という訳だ。

筑摩についてだろうか、それとも姉妹には話難い事なのだろうか… 提督さんになら話してくれるかもしれない。駄目だったら大淀と相談しよう。筑摩を呼んでな。

「こんにちは、利根」

「!？」

提督が挨拶をすると、利根は驚き空から提督へ視線を落とした。

「て、提督か…」

「どうした？空なんか見て」

「い、いや空なんて見てなどおらぬぞ？えつと…こ、このカタツムリを見ておったのじゃ！」

利根が指を指した塀の壁にカタツムリがいた。

ん？カタツムリ？…あれ？なんとなく陸奥に似ている気が…おつと、誤魔化される所だった危ない危ない。

「カ、カタツムリはな？実は塀を食すのじゃぞ？驚きじやろ？知っておったか？」

冷や汗ダラダラで目を泳がせながらカタムツ…失礼、カタツムリのウンチクを語る利根。

「ああ、知っている。というかそれを利根に教えたのは私だからな？」

どうやら相当焦っているな、そこまでして私に聞かれたくない事なのか…だがしかし！ここで諦めるような提督さんではなあい！

「利根」

「な、なんじゃ？」

「何か、悩みはないか？」

「ツ…」

利根が身体をビクツとさせ歯をくいしばり俯く。数秒の間が空き、利根が提督に問う。

「何故… そう思うのじゃ？」

「なあに、利根の眼を見たんだ」

「吾輩の… 目？」

「ああ、とても鋭く、そして悲しそうな眼を… な」

「…………… のう、提督」

「吾輩な…」

「今日、艦の時の夢を見たのじゃ」

「そう… だったのか…」

艦の時の夢、それは艦娘がごく稀に見る悪夢だ。どんな悪夢かは艦娘によるが、軽いものは一切無い。艦娘によっては夜中に奇声をあげたり、ただただ謝り続ける事もあるそう。利根を含めてうちの鎮守府ではこれで丁度10人目だ。あれ？意外と多くない？

「空から沢山の爆弾が吾輩と、皆に落ちてくる夢じゃ」

ふむ、一番多く見られる艦の夢だな。

「過去の事に縛られ、提督に心配をかけてしまうとは吾輩らしくもないな」

「いやいや、こうやって話が出来ただけでも凄いぞ？筑摩の時を覚えてるか？ベッドの

中で震えながら籠城して話すら出来なかつたんだが」

あん時の筑摩は凄かつたなあ……まさかただひたすらに布団にこもり続けるとは……それも3日。3日間ずっと筑摩を包んだベッドに話しかけてやっと出てくれた時の感動と言ったらほんと、こう……駄目だ。論ずるにすがござらん。一週間は俺の袖を離してはくれなかつたがな……とつても可愛かつた。

「覚えておるぞ、なに、吾輩は筑摩のやつより少しお姉さんなのだからな！心配はいらぬぞー！」

「ははは、そうか。ならばよし！だが、無理はするなよ？もしもまた同じような夢を見たのならすぐに私に相談するのだぞ？出来る事なら何でもするからな」

そう、この鎮守府にいるほぼ全ての艦娘の産みの親！艦娘を愛し！艦娘に愛されているといいなあ……そんなみんなのお父さんである提督の父性で包み込んであげよう！

「では、一つ頼みがあるのじゃが……」
「おう！何だ？」

さあ！何でもいざバッチコイ！

「その……わ、吾輩を抱きしめてはくれぬか？実は憧rぬおっ！」
なんだって？抱きしめるう？いいですよ！

提督は利根を強く抱きしめた。いや、包み込んだというべきか。そして優しく利根に

語りかける。

「利根、あまり一人で抱え込むな。俺を頼れ」

「提督…… あっばれじゃ」ボソツ

「ん？なんか言ったか？」

「いや、なにも言っておらぬ」

「おう、そうか」

二人が抱き合っていると大淀が提督を呼ぶ声が聞こえた。

「む？すまん、大淀が呼んでいるので行かねば…… 利根もくるか？」

提督はまだ利根を心配し、声をかける。しかし、提督の心配は杞憂に終わった。

「いや、我輩はもう大丈夫じゃ！安心して執務に専念するがよい！そして明日の休暇も目一杯楽しむのじゃ！」

そう言って、利根は提督に背を向け去っていった。

とても、元気な笑顔で。

幸運十雨Ⅱ時雨

提督の私室にて

(ううつ、こ、腰が痛い。寝返りもキツイな)

腰が痛いという台詞にアレな事やナニな事を考えてしまったその君！君は作者と同類だね。(失礼)

提督は寝付けず、ベッドの上で仰向けになり唸っていた。

いやあ、舞風と踊るのはたのしいんだが…流石艦娘というべきか、恐るべし体力よ。半日ずつとダンスはキツイって…ま、明日から休暇だしな、付き合っつてやらんとな。

ガチャ

ん？扉が開く音？誰だ…また山風が布団に潜り込みにも来たのかな？…過激派ってことはないよな？その場合扉の前にいる護衛艦の時雨は何をやってるんだって話だが…ま、あいつらが扉を開けるわけないな。絶対部屋ごと吹き飛ばしてるわ。

そんな事を考えながら提督は仰向けのまま薄っすらと目を開ける。

そこには、月明かりに照らされた乳時……失礼。時雨がゆつくりと提督のベッドに歩を進めていた。

(なんだ時雨か……)

提督は安堵し、目を閉じた。

「提督、寝た？」

びつくりさせないでくれよ……なんだ、眠っているか確認しに来てくれたのか？いい子やん。でも、ここで反応してお喋りをしてしまうと確実に明日起きれない。休暇をエンジョイする為に、早く寝ねば……という事で提督さんは心を鬼にして狸寝入りをします！おやすみっ！

「提督、ごめんね？」

ん？ごめんね？……んお？

提督の頭に浮遊感。時雨が提督の頭を持ち上げたのだ。

？……ああ、枕を変えてくれるのか！確かに少し汗をかいて枕が気持ち悪かったんだ。いやあー流石時雨、きがきくなーあこがれちゃうなー。

そんな事を考えているとゆつくりと提督の頭が下がる。

よし！これで快眠ができて……ん？枕が変わってない？

パチン カチャツ

パチン? カチャツ? なんの音なん… おお? な、なんか腹が重くなつた気が…。

提督のお腹が重い。不思議に思つた提督はそつと目を開ける。

するとそこには…

仰向けの提督に馬乗りをしている時雨がいた。

「えっ?」

提督は驚き素つ頓狂な声をあげて目を見開いた。

(ヤベエ! 俺の腹に排水量1, 685トンの時雨がぁ! 死ぬう!… これを、今叫んだら時雨に殺されるよな…)

「あ、提督、おはよう」

「ああ、おはよう… じゃなくて!」 ジャラジャラ
!?

提督が少し身体を起こすとジャラジャラと音がした。提督はジャラジャラと音がした首辺りに手を伸ばす。

ジャラジャラ

!!!!!!
!提督は音の原因を掴み、顔の前に上げる。

(くさ…り?)

提督は鎖の端を無意識のうちに探した。片方は、時雨が右手に握っている。もう片方は…

(俺の首に巻きついている!?)

提督は焦った。

(やっべえよ、前読んだ漫画にこうやって首に鎖を巻きつけて引つ張つて人を処刑するシーンがあるんだがそのせいで殺されるとしか考えられない!…やばい、漫画のワシシーンみたいでめっちゃテンション上がるわ。命の危機だけ)

失礼、提督は余裕があるようだ。

「提督」

「!!…な、なんだ時雨」

「提督…うそつき」

「…???」

うそ…つき?なんで?俺時雨に嘘なんかついたっけ?

「嘘をつくのはやめてよ…胸が痛いじゃないか」

「ちよ、ちよと待て。何のことだ!?!」

わけがわからないよ。

「提督、約束……覚えてる？」

「約……束？」

時雨との約束？なんかあったっけ？一緒に遊ぶ約束とかしたか？やっべ、マジで覚えねえ。

「……」

「提督」

「？」

「君には失望したよ」

「!？」

「ずっと一緒だって……言ってくれたよね？」

「?…… 当たり前だろう？提督と艦娘……運命共同体じゃないか」

鎮守府と海を守る艦娘が沈んだら、鎮守府にいる提督だって危ない。つていうか多分すぐ鎮守府に撃ち込まれて死ぬ。

「じゃあなんで……休暇を取ったんだい？」

いや、社畜になれと？いや、まあ、十分今も社畜だけどさ。

「いや、なんでつて「提督は!」!？」

「提督は……僕と離れたいんだよね？」

お前は何を言っているんだ。

「もう、うんざりしたんだよね提督。廊下で後をつけたり、服や下着を盗んだり、カメラで監視したり、ご飯に髪の毛とか入れたり、こつそりコーヒーに睡眠薬を入れたり、睡眠薬が効かないのは驚いたけどね」

マジでお前は何を言っているんだ。

「ずっと一緒だつて言ってくれたから、努力したんだ。出来るだけ提督と一緒にいようって。でも……迷惑だったみたいだね」

努力が方向音痴すぎるだろ！

「だから提督。僕は提督の近くにいるのを控えようと思ったんだ。でもね、手遅れだったみたいなんだ」

最初から手遅れな気が……

「提督の近くにいない僕が……考えられなくなっちゃった。僕はおかしくなっちゃったんだ」

最初から（ry

「だから僕は考えたよ。どうしたら提督と一緒にいられるのか……そして思い付いた」

ふむ、悪い予感。

「僕が提督のご主人様になればいいんだって」

「いや、その結論はおかしい」

「おかしくなんてないよ。提督は僕のペット。だから、提督は僕と一緒にだよ？ずっと、ずっと」

意味不明なんだが……簡単にまとめると、時雨は俺と一緒に居たいだけなんだよな？なんでペットという発想になるのかはよくわからんが……ん？ペット？俺を殺そうとしてるんじゃないのか？

提督は自分の首を触る。

(うーむ？鎖ではないな)

「どうかな提督。その首輪、苦しくない？」

成る程、鎖ではなく首輪だったか。

では、一体どうしたものか。休暇を無しにするわけにはいかんし……というか、これは本当に時雨が望んでいることなのか？俺と一緒に居たいだけならもつと方法があるはず。いや、こんな事を考えるよりやる事がある。俺は時雨との約束を破ってしまったんだ。だからまず

「すまない、時雨」

謝らないとな。

「??」

「約束を、守ってやれなくて」

「何を言ってるんだい？提督は僕とずっと一緒だよ？」

「主人とペットの関係でか？」

「？」

「時雨、お前はこの関係でいいのか？」

「この関係？」

「確かに、ずっと一緒にいられるかもしれない。だがな、お前はこの関係に満足か？少なくとも俺は御免だ。俺は時雨と、こんな関係ではやっていきたくはない」

「!?!?.. そう、だね。僕は提督をペットにしたかった訳じゃない。あ、ちよつとこれ持つてて」

「おお！わかってくれたか。やけに物分かりがいいがやっぱり主人とペットなんて冗談だったんだな。全く、時雨はお茶目だなあ！」

パチッ

時雨は提督に鎖を渡したのち、首輪を外し

「ありがとう、しぐ..」

パチンッ

…れえ？」

自分の首に付けた。

「そうだ。僕は提督をペットにしたかつたんじゃないんだ。僕は、僕が提督のペットになりたかつたんだ」

んん？んー？

「ありがとう提督、おかげで目が覚めたよ。僕は提督に命令されてあんな事やこんな事をされたかつたんだ。僕は提督のペットとして、ずっと一緒にいたかつたんだ」

そっかー。提督さんのペットになりたかつたのかー。なら仕方ないなー。じゃあ、主人らしくしないと。よし、寝よう（諦め）

「じゃあ時雨、俺の腹から降りておすわり！」

ゾクゾクツ

「う、うん。いや、わんわん！ハツハツハツ」

時雨が提督の腹から降り、ベットの横で正座をした。舌を出し、手を犬のようにして。尻尾や耳を幻視してしまうほど見事な犬っぷりであった。

「よし、いい子だ。じゃ、休暇中鎮守府を頼むよ」

よし、やつと寝れる。あ、この鎖…

「わん！…ち、ちよつと待つてよ提督！」

あーもう！めんどくせえ！

提督は寝転んだ状態で鎖を引つ張り時雨を引き寄せ静かにキレた。

「ヴツ」

「黙れよ。俺はお前の主人だ。俺の言う事を聞くだけでいい。口答えは許さん」

「~~~~~ツツ……わ、わふう」

「じゃ、おやすみ」

はあ、やつと寝れる。

その後の時雨

提督はずるいよ。あんなに強引に言われたら、断れないよ……あつ、また垂れてきちゃった。ふふ、止まない雨はない……けど、これはしばらく止みそうにないや。

「こんな状態じゃ眠れないよ提督」

収めないと…

「提督っ！提督っ！てっ… 主人！主人っ！主人っー！！くくくくッ！」

「ん、く、朝だあ」

「おはよう、主人っ！」

「はっ？」

初期艦十敵Ⅱイ級

浜辺にて、1人の男がぼーっと岩に座りながら海を見ていた。

「迎え…まだかな」

言わずもがな、提督さんその人である。

提督さんのお家は遠く住み込みで提督をしており、休暇を貰って久しぶりに家に帰ろうと迎えを待っているのだが…。

ちらりと腕時計を見る。

「30分オーバー…か」

迎えが来ない。

「あー！遅い。お前もそう思うだろ？イ級」

「キュー」コクコク

少し離れた海上から返事が返ってきた。

イ級。地球で一番最初に発見された深海棲艦である。通常は青緑の目をしているのだが、強くなると目の色が変わっていく。

「にしても日本ってネーミングセンスないよな。なんだよイ級って。リ級なんか泣いて

たぞぞ?」

「キュイー!!」

「まあ、名前が浮かばなくて放置して、日本が名づけた名前をそのまま使ったのも悪いけどよ…。」

「キュー!キュー!」

「そう怒んなって… あ、そうだ!」

提督は立ち上がり、近くに止めておいたバイクのサイドバッグから何か円盤状の物を取り出し、自分が濡れるのも気にせずジャバジャバと海に腰辺りまで入り、それを掲げた。

「これ、お前好きだろ?」

提督が手に持っていたのは、frisbeeだった。

「キュ、キュ、キュイー!」

イ級は凄いスピードで提督の近くまで寄り、身体を擦り付けた。

「そう急かすなって…。」

提督選手、大きく振りかぶって…

「そおい!」

投げたっ!

「キューーーーー!!」

天高く飛び上がったfrisbeeを追いかけて

「キューーーーー!!」

まるでイルカのような滑らかな動きで水面から跳び上がり、見事にfrisbeeを口でキャッチ。

バツシャーン

「おー、ナイスキャッチ! さつすがイ級!」パチパチ

提督はイ級のパフォーマンスに感動し、無意識に拍手までしていた。

「キュイツ!」

「うおっ! びっくりした。。。急に浮上してくんなって」

「キュキュツ!」

「え? もう一回? しようがねえなあ!」

frisbeeをイ級から受け取りもう一度投げる。すると、すぐさまイ級が取りに行き、また提督が投げる。また取り。。。投げ。。。取り。。。

「よーし! また投げ。。。ん? 日が落ちて来た?」

振りかぶった状態を解き、ボーっと水平線を眺める。

「キュイ?」

投げるのを唐突にやめた提督を不思議に思い近付いてきたイ級。

「ああ、ごめんな。：：。なあ、あいつらつてさ。なんで分かってくれないんだろうな。俺は。：。地球の支配なんて望んでないつてのに」

「キュイ!キュイキュイキュイ!キュイ!キュイ!」

「そんな事よりフリスビー投げろ?お前なあ。：。ん?」

ふと提督が顔を上げると、遠くに人影のようなものが見える事に気付いた。

「あれは。：。レ級か?」

「しれいゝかゝゝん!」

「正解だな」

遠くで両手を広げてブンブンと振るレ級。透き通った声がここまで聴こえてくる。

「じゃ、行くとしますかね」

「もう！司令官つたら！電話に気付かないなんて！」

「すまない。まさか集合場所を間違えていたとは……しかしだな。電話300件はかけすぎじゃないか？」

「それだけ心配だったの！」

「……申し訳ない」

海上に立ち、喋るレ級と提督。

レ級はプンスカと起こっており、提督はただただ謝っていた。

「こんな事で怒つてもしょうがないわ。帰りましょう司令官。みんなが待っているわ
！」

「そうだな、では帰ろうか。あ！あいつらの巡回ルートは覚えているか？」

「当たり前じゃない！さあ！行くわよ！」

「ああ。イ級、行くぞ」

「キュイ！」

そう言つて2人と一匹は海へと潜つてゆく。提督は清々しい顔で、レ級は満面の笑みで。そしてイ級は……ごめん、表情読み取れない。

一方その頃鎮守府では
ガチャ

「時雨、提督さんのお部屋で何してるっぽい？」

「提督を待つてるんだ」

「でも、暫く返ってこないって大淀さんが言ってたっぽい……」

「大丈夫だよ。ずっとここに居るわけじゃないから」

「うーん、でも早く寝るっぽい！夜更かしはダメっぽい！」

「そうだね。じゃあ、もう少ししたら部屋に戻るよ」

「わかったっぽい！」

バタン

「……行つたね……よし」

時雨は提督のベッドに近づき……匂いを嗅いだ。

「ふがふが……ふっ……ふっ……ひがっ……んっ……れろっ……ん……ちゅ……じゅる……」

そしてあろうことか舐め出してしまった。

（提督……提督が帰ってくる頃にはこのベッドはびちやびちやだろうね……。提督……僕は羨のなっていない悪いペットなんだ……。だから……帰つて来たらいっぱい羨けてね？）

提督十深海棲艦Ⅱ家族

暗い暗い海の底：：人間であればペシヤンコになるであろう水圧の中、二人の男女が海底に立っていた。

「私はこの船に：：帰って来た！」

そう言つて両手を掲げる我らが提督さん。その目の前には大きな大きな船のようなものが沈んでいた。

「司令官、お仕事お疲れ様！」

にこつと笑うレ級：：天使かよ。

「じゃ、久し振りに会いに行きますか。我が子達に」スタスタ

「司令官の帰りをみんな楽しみに：：。つて！待つてよしれいかくん！」タツタツタツ

「ここは深海、光などないはずなのに二人はまるで見えているかのように進んで行つた。

二人が船のようなものに近づくと

ウイーン

ボディの一部が吊り上がり船内に入る為の扉が露わになった。二人は戸惑うこと無く扉に近づく。

「—————」

何かを眩くと扉が開き、中には

「お、おかえりなさい提督。ご飯にする？お風呂にする？それとも……わっ、わ、た、し？」

顔を真っ赤にしながらも指をついて提督を迎え入れる裸エプロンの港湾棲姫がいた。つてかエプロン小さ過ぎない？色々見えそうだよ？何がとは言わないがね。

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙の後、白い肌を真っ赤に染めた港湾棲姫の背後からひよっこりと北方棲姫が現れ、港湾棲姫に耳打ちをする。

「ゴニョゴニョ」「えっ、でも……」「ツベコベ言ワズニヤル！」「う、うん」ガシツ

港湾棲姫は突如そこら辺を泳いでいた魚を思いきり掴み取り、身体とエプロンの間に突っ込んだ。

そしてわざとらしくその場に倒れ込み

「あ、い、いや〜ん。魚が入って来ちゃった〜。て、提督取って〜」

「取るのはいいが…」

「え？… あっ」

港湾棲姫の大きな手で思いつきり魚を掴んだのだ。魚が潰れてあたりが赤く染まっている。着ているエプロンも胸の辺りから赤く染まってゆく。軽くホラーである。でも… ヤンデレ港湾棲姫… アリだな。

「あのっ、そのっ… 洗ってきますす！」 バタバタ

「お、おう。いつてらっしやい？」

港湾棲姫は早足にその場を立ち去り、背後に隠れていた北方棲姫だけが残った。置いていかれた北方棲姫はトテトテとこちらに近づき

「提督、才帰リナサイ！」

「ああ、ただいま。なあ、港湾棲姫はどうしたんだ？」

「ワカンナイ！」

「そうか。じゃあ、さつき港湾棲姫になんて言ったんだ？」

「秘密だ！」

「そっかー秘密かー」

結局なんだったんだろうか。でも秘密を無理矢理聞き出す「離島姐チャント約束シタ！ダカラ秘密！」「そ、そうか」

後で離島棲鬼に聞いてみるとするか。

「提督！ミンナ奥デ待ッテル！ハヤク！ハヤク！」

北方棲姫が提督の服を掴み引ッ張る。

「おお、そんな引ッ張るなよ…レ級、行くぞー！」

「私はここを掃除してから行くわ！司令官は早く行ッてあげて？みんな司令官が来るのを楽しみにしていたのよ？」

そう言ッて真ッ赤な水を尻尾の口から吸い込み始めたレ級。

「わかった、出来るだけ早く来いよ！」

北方棲姫に引ッ張られ奥の部屋に連れて行かれる提督をレ級は手を振ッて見送ッた。

「で、どこに行くんだ？」

「ソノ部屋！」

北方棲姫がすぐその扉を指差す。提督が手を伸ばしその扉に触れる。すると扉はスウと消えてしまった。そして提督がその部屋に一步踏み出すと

『おかえりなさい！』

と言う声とともに沢山の深海棲艦が提督に雪崩れ込む。

「えっちよまっグハア！」

提督は突如現れ雪崩れ込んできた深海棲艦に押し倒され揉みくちやにされた。

待て待て待て！痛い！苦しい！重い！柔らかい！……ん？柔らかい？つてかちよ！息が……

そんな事を思いながら揉みくちやにされていると掃除を終えたレ級がやってきた。

「待たせたわね司令官っ！……あれ？あれ？……もうっ！みんなはしやぎ過ぎよ！ほら！司令官が苦しそうじゃない！」

そうレ級が一喝すると深海棲艦達は渋々と提督の上から退いていく。

レ級……ありが……と……

「もう……司令官？司令官！司令官！！」

提督は薄れゆく意識の中、ふと思った。

結局柔らかいのは一体…

今日の鎮守府

提督の私室にこっそりと忍び込んだ漣。

「人の気配はなし… 今がチャンス」ボソツ

そう呟きながら提督に使われていた筋トレグッズ達に近づく。

「ふっふっふっ、宝の山ですなあ。で、では早速… いただきます」

漣は提督のダンベルを手に取り、持ち手を舐めだした。

「ちゅ… じゅる… んふ… こりえ… しゅご… ひゆぎ… んっ… おいひい…

もっろお…」

今度はダンベルをしゃぶりだす漣。

「じゅるるるるる… んはあ… んちゅ… じゅる… はあ…」

漣の右手がゆつくりと下半身へ…

「漣」「んひゃあ!？」

漣が驚いて後ろを振り返るとそこには

「なにをしているのかな？」

何故か時雨がいた。

「あのですね…これは…その…」

目をぐるぐるさせながらもなんとか誤魔化す案を考えるが…

「提督のダンベルを舐めて自慰してたんだよね？」

見られていたならどうしようもない。漣の目からハイライトさんがコンビニに行つた。

「……………はい。あの…みんなには内緒って事には出来ませんか時雨様。間宮券なら好きだけ「要らないよ」……なにが望みだあー!」

「しーっ、静かにして?望みもなにも僕も提督の部屋に侵入してるんだよ?周りに言えるわけないじゃないか」

漣の目にハイライトさんがコンビニから帰ってきた。え?なに?ガリガ〇君買ってきたの?一つくれんの?ありがとう。

「ふうー、社会的に死ぬかと思ったー。あり？時雨殿はどうしてここに？」

「なあに、漣と一緒だよ？」

「一緒？」

首をかしげる漣。

「つまり…」

時雨は落ちてしているハンドグリップを拾い… 持ち手をしゃぶり出した。

「んっ… ペろっ… ペろ… んじゆるるるるるるっ!!」

「なっ… なっ!!」

「ちゅぽっ… ね？一緒でしょ？… ねえ漣。美味しいよ？一緒に食べよ？ほら、ハン

ドグリップはもう一つあるよ？」

そう言って差し出されたハンドグリップ。漣にはとても魅力的に見えた。

「む…」

「要らないのかい？じゃあこれは僕が… 「あっ…」 やっぱり欲しいんだよね？正直になりなよ。きつと

気持ちいいよ？

「あっ…… あ…… あああ!!…………… い」

「なに?聞こえないよ?」

「…… 欲しい!欲しいです!下さい!」

漣は誘惑に、負けた。

「れいろく…… れろ…… んふっ…… んっ……」

「ごしゆりん…… んにゆ…… ひやまあ……」

二人の艦娘に友情が芽生えた瞬間である。

うう：：慣れない高笑いはい止めるべきでありますなあ：：。

ん？秘書艦はどうしたのか、でありますか？それでしたらそちらのソファで：：

「すう：：すう：：」

自分の秘書艦のモグ：：まるゆが寝ているであります。

正直なところ全然使えないであります、仲が一番よく、万が一自分の事がばれても簡単に丸め込めるのであります！

まるゆは自分の事を同じ陸軍出身だと思っていて好意的に接してくれているのでありますから、少しだけ心が痛むのであります：：まあ、提督のナデナデかまるゆかと聞かれたら少し迷って提督のナデナデを選ぶ程度の情ではあります。

にしても提督殿は毎日この様な仕事をこなしているのでありますか？終わる気配が無いであります。これならたまにある出撃の方が断然楽でありますなあ。しかし出撃は出撃で日焼けが「邪魔するわよ」ん？誰でありましょうか

執務室にお邪魔したのはツンデレ四天王の一角である綾波型 8番艦の曙。つまりみんな大好きぼのたんである。

「おお、ぼのたん殿「ぼのたん言うな！」：：何用でありますか？」

「あきつ丸がきちんと提督が出来るか見にきただけよ：：な、なによニヤニヤして」

「いえく？なんでもないでありますよおく？別にいく？」ニンマリ

「な、なによ…」

「分かつているでありますよ」

「!?な、何がよ」

「曙殿は提督のお役に少しでも立ちたくて仕事を貰いに来たのでありましょう？そして提督がお帰りになった際には褒めて貰おうとか思っているのでありましよう？曙殿も隙がありませんなあ？」

そのまま口が上へ飛んでいくかのようが高く口角を上げるあきつ丸に凶星を指された曙は慌ててどうにかすつとぼけようとした。

「ななななななつ、ななつ、なんのことつとかしら？」

駄目だ慌てすぎて全然すつとぼけられてない。

「曙殿は本当に分かりやすいでありますね。仕事なら秘書艦の仕事がまだあります。さて、どうするでありますか？」ニヤア

「こ、こ、こんのクソ蜻蛉！…だれが秘書艦の仕事なんて…で、でも人手が足りないならしょうがないわ！そう、これはしょうがない。しょうがないから私が手伝ってあげるの。べ、別に帰ってきた提督に褒められたいなんて思つて無いんだから！」

なんやかんや言いながらもやってくれるラブリーマイエンジェルぼのたん！ぼのたん天使！マジ天使！

「素直じゃないでありますなあ…さ、この書類をお願いするのであります」
「い、い、わよ」

曙はあきつ丸から紙を受け取り、秘書艦用の執務机で作業を始めた。
執務室はまたペンを走らせる音のみになる。

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカ「ねえあきつ丸」
沈黙に耐えかねたのか話しかける曙。

「?…なんでありますか?」

「すう…ふう…ごめんね」

「深呼吸をした後、キリツと真剣な表情になりあきつ丸に謝る曙。」

「?????」
「ずずず」

あきつ丸は何故謝られているのか分からなかった。さつきからかったのは自分の方であるはずなのに…。考えてもわからないあきつ丸はとりあえず落ち着こうとお茶を飲む。

「あの…実はね…私、最初あきつ丸の事を深海棲艦だと思ってたの」

「(い)ふうふうあぼっ!!」

あきつ丸は盛大にお茶を噴き出した。しかし書類は一切濡れていない。流石あきつ丸、噴き出す寸前に自分の顔を下に向け床とひざにお茶をぶちまけたのだ。

「うわお茶が！拭くもの拭くもの！」

あきつ丸は椅子から立ち上がり洗面所に向かおうとする曙に問いかける。

「な、何故自分が深海棲艦だと？」

動きがぴたりと止まりこちらを見る曙は申し訳なさそうにもじもじしながら理由を話してくれた。

「いや、その……肌が真っ白で……片言を喋っていたから……知性を持った深海棲艦にしか見えなくて……あの時は配属されたばかりで疑心暗鬼になって……今まで本当にごめんなさい」

「は、肌は白粉で、片言だったのは緊張していたからでありますよー！」

「わかっているわよ！でも、初めはそう見えてキツイ態度をとっちゃって……その……ごめん」

「想像力豊かでありますな……あ、なるほど！だから当たりがキツかったのでありますな。自分हतつきり提督と仲がいい自分に嫉妬しているのだとばかり」

「そ、そんなわけないわよー！」

実はその理由もちよっぴりあった。

「：：　ところで曙殿。できればタオルか雑巾をお願いしたいであります」

「あーごめん！持ってくるわ！」

そう言つて執務室の扉を開けダツシユで洗面所までタオルを取りに行く曙を見届けてホツとするあきつ丸。

「ふう……」

「あつつつつつつぶねえのでありますう！」

椅子から立ち上がり胸を押さえるあきつ丸。

「曙殿は想像力豊か過ぎるでありますしよう！しかも正解とはタチが悪い！」

天に向かつて叫んだあきつ丸はがくりと腕力して机に突つ伏した。

「はあ：：　はあ：：　よかつた：：　ボロを出さなくて本当に良かつたであります：：　背後からズドン！とか洒落にならないであります」

ニヤリ

「まあでも？曙殿も結局は騙し切つたのでありますし？やはり海軍はクソザコでありますなあ！あーつはつはつはお！？ごべえあ！ごぼつ！かはあ！」

うう：：　高笑いの練習をするべきでありますな。

「タオル持って来たわよ！」

「おお、ありがとうございます！」

さて、拭いたら曙殿と一緒に頑張るでありますか！

「あ、そこ間違っているであります」

「えっ？・・・わ、わかつてるわよ！」

「あわわわわ！すいませんあきつ丸さん！曙さん！」

「大丈夫でありますよ」

「はい、まるゆちゃんの仕事」

「遠征から帰投したよ。不死鳥の名は伊達じゃない」

「お帰りであります。書類はそちらに・・・」

「あんのクソ提督！こんな本を隠してるなんて！こ、こんなエツチな・・・」

「それ、深雪殿から没収したものであります」

（絶句）

「じゃあ、まるゆを送るわ。仕事は程々にね？おやすみあきつ丸」

「おやすみであります。あと少しで終わるので心配ご無用であります」

「あきつ丸さん、おやすみなさい」

ボタン

「ふう… 今日は大変でありましたな。明日もあると思うと嫌になるのでありますよ…」

うだうだといいなから帽子を取る。帽子で隠れていたその頭には先端が赤く染まつた二つの小さな角が生えていた。

「さて、提督に今日の戦果やらを連絡するとするでありますか」

懐から携帯を取り出し提督に電話をかける。

おや？出ないでありますなあ… まさか提督の身に何か良からぬ事が！… あるわけないでありますな。雷… レ級殿が一緒にいらっしやるので大丈夫でありますよ

う……。明日改めて連絡するであります。しかし、念の為。

執務室の扉を開け

「さあ、カ号のみんな、出番であります」

そう言つてカ号観測機を送り出した。

しかし提督のお声が聞こえないとなりますと今日のオカズが……。はっ！ここ執務室では提督が！毎日！作業を！はあはあ……。今日のオカズが決まったでありますな……。

「あ」
—————
「あ」

「お尻に執務机の脚……イケルでありますな！」

クール+マゾⅡ若葉

今、ある男が船内にて目覚めた。

「ぐっ… 墜ちる… 操縦が… ぬう… … はっ！」

そう、我らが提督さんである。

「… 夢… か…」

ベッドより跳ね起きた提督さんは汗びっしりりで、そして全裸であった。脳内ピンク一色な艦娘達には大喜びされるだろう。

「ん？汗？ああ、水を抜いたのか」

水を抜いたという事は… ああ、やっぱり。

提督が寝ていたベッドの右側にはテーブルがあり、その上にはいくつかの皿に料理が載っていた。

きつとレ級が作ってくれたんだな… ありがとう、レ級。所でここは… 私の部屋か？うん、配置は変わっているが私の部屋だ。さて、ではいただくとしましょうかね。

すると提督は全裸で食事を始めた。

「おお、これは鯖の味噌煮じゃないか… うまい… もぐもぐ」

提督が m g m g していると背後にある扉が開いた。

「オイ！提督！」

「ん？北方棲鬼じゃないか。どうした？」

「唇クレ！」

「!?ぐつ、ごつふ、ぶふお…い、いきなりどうし「北方!?イキナリ何処二…アツ」あつ」
先程北方棲鬼が入ってきた扉からやってきたのはボンネット装備のロリ深海棲艦こ
と離島棲鬼。最近こつそりとパソコンで漫画やイラストを描いたり小説を書いたりし
ているそうだ。提督にはバレていない。というか提督にだけバレていない。

「おお、離島棲鬼！今帰ったぞ！」

お前は父さんか。

「オ、オ帰りナサイ。ツテ人間ガ付ケタ名前ナンカデ呼バナイデー！」

「はいはい。ただいまりっちゃん」

「ソウジヤナイワヨ！番号デ呼ビナサイ！」

すると扉からもう一人。

「呼ビマシタカ？」

「リ級ハ呼ンデナイワヨ！全ク、薄汚イ人間ニ付ケラレタ名前ナド…」

「所で離島姐チャン！提督ノ唇ツテナンダ？ネーネー！」

ブツブツと言いなから立ち去る離島棲鬼、その後を追う北方棲鬼。部屋には全裸提督とリ級が残った。

「…鯖の味噌煮、食うか？」

「イエ、ソナナ…」

「遠慮するな、ほら！あーん」

「ア、アーン」

「うまいだろ？」

「ウ、ウン。美味シイ」

さて、離島棲鬼へのお仕置きは何にしようかなー。

離島棲鬼は人間が嫌いだ。提督を敵として戦う人間が大嫌いだ。提督に与えられた番号があるというのに勝手に名前を付けてくる。提督に好意を持ち、関わる人間もい

る。そんな奴らも嫌いだ。だって私と提督が会える時間が、喋る時間が、あの楽しい時間が減ってしまう。

パソコンを起動する。

人間は嫌いだ。そのなかでも、一番嫌いな種類の人間がいる。

そして、何時ものサイトを開いた。

「ツモウ！ナンデ私ト提督のラブラブ本ガ無いノヨ！何時モ何時モ提督ト絡ムノハ艦娘バカリ！ナンデヨ！提督ト私ノラブラブ本ガアツタツテイイジヤナイ！監禁ヤ調教デモ相手が提督ナラ喜ンデコノ身体ヲ差シ出スワ！ヨシ！今日モ元氣ニ描クワヨ！流行レ！私ト提督ノ本！」

離島棲鬼は、人間が嫌いだ。

「ア、ソウイエバナナンデ提督ノ所行ツタンダツケ？マア、イイカ」

「ムニヤムニヤ……レップウ……置イテケ……」

提督の居ない鎮守府にて、黙々と遠征をこなし、黙々と戦い、黙々と仕事をするとある駆逐艦がいた。

「駆逐艦、若葉だ。艦隊が帰投した」

そう、提督の秘書艦になれば24時間寝ずに働き、敵の攻撃を受ければ悪くないとまるで効いていないかの様にクールに振る舞う。

「お疲れ様であります!… ってちよつと!どこに行くのでありますか!」
「出る」

「いやいやいや!ふらふらでありますよう!」

「24時間、寝なくても大丈夫」

「若葉殿、睡眠はきちんと取らないと駄目なのであります!」

「大丈夫だ」

「絶対に大丈夫じゃ無いのであります!」

「安心しろ」

「何処に安心する要素があるのでありますか！ほら、早く！今日はもう遅いのですで…」

「くっそお…」

「そのまま自分の部屋に戻って今日はもう寝てください」

執務室から追い出された若葉は初霜と自分が使っている部屋へふらふらと向かった。今の時刻はヒトヒトマルマル頃、こんな時間には誰も廊下を歩いたりしていないだろう。

「寂しいよ…提督…」

そう口に出した途端、目から何か溢れそうになった。慌てて目元を拭うが、止め処なく溢れ続ける。

「私…頑張ったよ…弱音なんか吐いてないよ…」

もう前すら良く見えていない。だが何万回と通ったこの道だ、目をつぶつても壁にぶつかる事はないし、部屋を間違える事もない。

「ひっく…だから提督…安心し”て”…」

溢れて一向に止まる気配がない涙を拭うのをやめて、部屋を指す。

「安心し”て”：：た”い”し”よ”う”ふ”：：た”か”ら”あ”：：」

彼女は提督に言われたのだ。俺は暫く居なくなるけど：：この鎮守府を宜しく頼む：：と。

「ひっぐ：：うう：：ぐすん」

自分が弱音を吐くわけにはいかない。自分が休むわけにはいかない。自分が泣くわけにはいかない。そう言い聞かせて働いた。全ては提督の為に。提督が安心して帰ることが出来るように。そして：：褒めてもらえるように。ああ、きつと無愛想な返事しか出来ないんだろうな。でも口は勝手に釣り上がってしまった。そんな事を考えるだけでまた溢れてしまう。ふと、自分の足が止まる。おや？ああ、いつのまにか自分の部屋の前まで来てしまったのか。

流れっぱなしの涙を拭う。

初霜に泣いている姿を見せる訳には行かない。初霜も提督が居なくなつて不安になつている筈だ。姉である私が泣いていてどうするんだ！

今日は布団の中でこっそり泣こう。そして、明日からまた頑張ろう。

そう決めて、部屋の扉を開けた。

「提督の魚雷発射管の角度調整しゅごいのおおおお！私のぷっくり膨らんだ魚雷発射管かられちやうのお！んひやい！しよれらめっ！わ、わらひの右のピンク色の電探しやんが黒くなつちやううう！その輪形陣使つちや駄目でしゅ！お祝いしゆるにはその輪形陣はいりましえん！生で！生でぶち込んでくらひやいいいいい！」

「スン…」

そつと若葉は、妹に弾をぶち込んだ。

写真+レコーダー=修羅

深海棲艦には二つの勢力があつた。

一つは提督率いる穩健派。

人類との共存を望んでおり、過激派と日々戦っている。争いを好まない者、人間が好きな者、提督の意思に従うという者。主にこの三種類の深海棲艦が所属している。

艦娘と出会えば蹴散らすか見て見ぬ振りをする。

提督の命令は絶対。

みんな提督が大好きで護りたいと思つている。

そして二つ目が駆逐古鬼率いる過激派。

自らを過激派と名乗り、提督にもそう呼ばせている。

提督にこの地球を支配してもらふ事を望んでおり、艦娘と戦うのは殆どこいつら。戦いが好きな者、人間が嫌いな者、提督を困らせたりしたいという者、元艦娘の者。主にこの四種類の深海棲艦が所属している。

艦娘と出会えば基本即戦闘である。

提督を困らせている事は理解しているが、提督の為なので致し方なし。

みんな提督が大好きでこの地球を捧げたいと思っている。
流石我らが提督！愛されてるな！（白目）

そして、過激派筆頭の駆逐古鬼は今…

「ダカラサ…ソナノ作ツタツテサ…何ニナルノサア！」

「何よ？カレー作ってるだけじゃない」

レ級と一緒にカレーを作っていた。

何故この様な事になってしまったのか。それは提督が深海棲艦に押し潰される少し前まで遡る。

「おお、そんな引つ張るなよ…レ級、行くぞー！」

「私はここを掃除してから行くわ！司令官は早く行つてあげて？みんな司令官が来るのを楽しみにしていたのよ？」

そう言つて真つ赤な水を尻尾の口から吸い込み始めたレ級。全て吸い込み終わり、外へ出す為に先程入つて来た扉を少し開け赤い水を排出した。すると

「ウワア！目ガアアア！目ガアアアアアアア！」

手を目元に当てとある映画の大佐の様な事を言いながら転げ回っていた。

「ん？あら？駆逐古鬼じゃない！今日はどうしたの？そしてそれただの血よ」

「目ガアアア：：ナンダ、タダノ血力：：ア！ソウダ！今日ハ我ラガ主ガ帰ツテ来テイ
ルンダロ？」

「ええ、そうだけど：：」

「一目！一目！デイイカラ見セテクレ！」

「貴女：：地球を手に入れるまで司令官禁するんじやなかったの？どうせ司令官禁とか
言いながら夜な夜な司令官で自慰でもしてるんでしょ？」

「ナ！ナ、何故ソレヲ！」

「えっ!?本当に!？」

「アツ：：：： 兎二角頼ム！」

「うーん」

レ級は少しばかり腕を組み考え。

「条件があるわ」

「才願イダ！何デモスル！モウ耐エラレ無イ！」

「ん？今なんでもって言ったかしら？じゃああの扉の奥にエプロンあるからそれ着けて

待つててちようだい」

「エ？エプロン？」

「じゃ、司令官待たせてるから！」

「チョ、チョット！…行ッテシマッタ！…」

一人取り残された駆逐古鬼は戸惑いながらもレ級が指した扉の奥へ向かうのだった。

そこは厨房であつた。

戻つてきたレ級が取りに行つていた花柄のエプロンを駆逐古鬼に着せて何か準備をし始めた。因みにレ級はハート柄であつた。

そして二人はカレーを作り始めた。

「ヤメダ！ヤメ！面倒クサイ！」

「あら？いいのかしら？」

「ア？何が「司令官が食べるのよ？」…」スツ

すると寸胴に自分の足をかけて入ろうとする駆逐古鬼。

「ちよ、ちよつとなんで鍋に入ろうとするのよ！」

「一生ノ才願イダ…主二私ヲ食べサセタイ。イヤ、食ベラレタイ。性的ニモ、物理的ニモ」

「こちら！キッチンと司令官に言ってからにしてください！いきなりだと司令官がびっくりしちゃうでしょ？」

「ソ、ソソソ事無理ニ決マツテイルダロ！主ト顔ヲ合ワセルトカ：：ハ、恥ズカシイ：：死ンデシマウ：：ア！」

何か閃いたのか、顎に手を当て考え始めた。

「ん？どうしたの？」

「ソウダ：：コウスレバ：：艦娘ヲ：：ヤレル：：」ブツブツ

「おーい、おーい？」

「ソウト決マレバ：：」ブツブツ

「おーい！おーい！聞こえてるー？」

「ヨシ！ジャアナ！」シユバツ

「あ、ちよつと：：行っちゃった。一体なんだったのかしら？：：あ！カレーカレー！ふう：：あ、そういうえば港湾棲姫が握りつぶしたこの魚どうしましょう：：味噌煮でいいわね！司令官お味噌好きだし」

レ級達がカレーを作った次の日の早朝。とある鎮守府の駆逐艦寮に一つのボイスレ

コーダーが投げ込まれた。写真付きで。

その内容は

『ヤアヤア、艦娘諸君。オ前ラノ提督ハイタダイタ。ドウスルノカツテ？ソレハコレカラ私ガ… エット… ソノ… エ、エツチナ事ヲシ、シチャウゾ！ソレガ嫌ナラヒトサ
ンマルマルニ… ドコダツケ？… ア！北太平洋マデ来ナサイ！詳シクハ近クニ来テ
カラ教エル』

というもので写真にはベッドで眠る提督と満面の笑みを浮かべて自撮りをしている
駆逐古鬼のツーショット写真だった。駆逐古鬼の顔が真っ赤であったのは言うまでも
ない。

その日、艦娘は修羅と化した。

「写真ナラナントカ顔ヲ見ラレルシ艦娘モ釣レル！流石私！天才ダ！」

「んっ!：： 大丈夫っ：： まだっ、航行可能ですっ：： だから提督：： もつと!もつと!もつと虐めて下さいっ!」

艦娘達が修羅と化す少し前。

提督不在の鎮守府では駆逐艦寮陽炎型室のベッドで浜風が日課の自慰をしていた。

提督が居なくなる前は本人がどうか我慢して1日3回までに留めていたが、提督が居なくなつてからは寂しさと解放感で猿の様に盛り、1日15回という恐ろしい数字を叩き出していた。

参考までに言うがあの空母加賀でも1日14回である。

い加賀わしい：：。

浜風が自慰に浸っているとガシャーンと急に窓が割れ、何か飛び込んできた。

浜風は自慰行為の途中だったにもかかわらず、窓が割れた途端に艀装を展開し、飛び込んできた何かに砲身を向けた。

「敵しゅ：： うっ?」

そして、こんな姿を同僚に見られたら色々と終わるといふのに真つ先に危機を知らせようとしたのは流石艦娘と言つた所だろうか。

「これは…なに？」

飛び込んでできたのは黒く四角い箱だった。なんの変哲もないただの箱である。強いて特徴を挙げるとするならば妙につやつやしている事だろう。

浜風が主砲をその箱に向けながらどうしたものかと考えていると。

「なんだ今の音は！大丈夫か！」バキィ！

割烹着姿の磯風が扉を蹴破り飛び込んできた。

するとそこには顔が赤く太ももから液体を垂れ流して艤装を展開している浜風の姿が…。

「あっ」

そして、この蹴りを喰らつた扉は後にこう語つた。

『ありがとうございます！』

「浜風は、喜んでくれるだろうか」

今日、非番である磯風は先程まで厨房で秋刀魚を焼いていた。

出来上がった焼き秋刀魚を同じく非番の浜風に見てもらおうと陽炎型の部屋を
目指して歩いていると

ガシャーン

「!?なんだ今の音は!」

磯風はすぐさま艦装を展開し、音のした方へと向かった。この時焼き秋刀魚は磯風の
手から離れ、窓を飛び出し、偶々偶然そこを歩いていた扶桑姉妹の姉の口へと向かった。

「ああ。。。提督、空はどうしてあんなにも青いのでしょうか。私の心も、提督にむ
ぐつ。。。うおえええええええええ!」

「えっ!?ね、姉さまあああああああああ!?!」

「な、なに。。。この口の中に広がるのは。。。うっ。。。やっぱり私、沈むのね。。。山城が無
事なら良かったわ。。。」

「そんな。。。扶桑姉さま。。。あちらの世界でも。。。ご一緒に。。。」
「山城。。。」

「姉さま……」

そんな事があつたとは全く知らない磯風は音がした部屋へと向かう。

(こゝは陽炎型の……今日は浜風しか居ない……一体何が！)

磯風は助走をつけ扉を蹴破り、すぐさま主砲を構えた。

すると何とそこにはえちえちな感じの浜風が、えちえちな格好でさもえちえちをして
いたであろう証拠が目一杯の状態で、窓硝子が割れ、艀装を展開した状態でこちらを見
ていた。

磯風はすぐに察した。

(きつと絶頂し過ぎて艀装を展開し窓を撃ち抜いてしまったのだ)

磯風は回れ右をしてその場から離れようとしたが

「違う！ 違うの！ 誤解だから！」

…… どうやら誤解らしい。正直何処を誤解すればいいのか分からないが、取り敢えず
浜風の話の聞いてみる事にした。

取り敢えず双方艤装をしまい、浜風は必死に誤解を解いた。

「ふむ、なるほどな」

「分かってくれたのね……」

誤解が解け、ホッと胸を撫で下ろす。

「にしても急に箱が……開けてみないか？」

実は浜風が必死に誤解を解こうとしている最中もずっと黒い箱が気になって仕方がなく全然話を聞いてなかった。今もどうやって開けるか弄っている。

「全然話聞いてない……いや、何か危険なものかも「なんだこれは？」もう開けてるじゃない！」

箱の中に入っていたのはボイスレコーダー。磯風はそれを取り出し、好奇心でついスイッチを入れてしまった。

浜風はすぐさま艤装を展開し、割れた窓から飛び出した。磯風が必死に待てと叫ぶが浜風には届かない。磯風は取り敢えず浜風を放っておき、このボイスレコーダーを持って執務室へと向かい、放送で流した。すると全艦娘が執務室に一瞬で集まった。皆、怒りで震えていた。

あきつ丸は恐怖と困惑と胃痛で震えていた。

「もう…どうにでもなれ…であります」